

141  
98  
1

阿  
荊  
殿

伴信友自筆言本

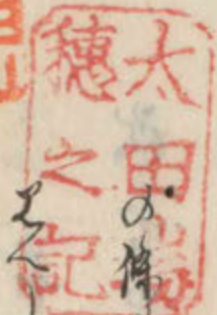
上田中丸論難司難

「太田中丸論難」未完  
「北條氏正史」未完  
「河内文庫」未完

論難ハ上田中丸、研成今道ノ説ヲ如ク  
本吾宣長

北條氏藏書

秋成の初冬の論文ハ馬



全文より何れか、いさうつゝおまのて見ゆ入そのゆへ

負田安甲の及の中間藤原美樹の若トリ小物ハ共ニ他人の偽作ハ

あつたこと疑ハし、本事とて多し、よて、ふり、あつた

秋成ノ子問答ハ往年美樹子小遇ニ時借ニ与ヘラ、是レを字藏

ナク、河内ノ紀里ハ東、古云、秋の岸、端小美樹の、い、し、り、三、文、成、と、そ

あつた、事、と、疑、や、見、た、と、い、ふ、物、人、の、偽、作、小、河、内、美、樹



伴信友自筆寫本

上田秋風論難同難

秋云

酒竹文庫

論難ハ  
上田秋風  
本君宣長

北條氏藏書

秋風の初交の論文ハ馬

一と云ふは、あふこつ小志多きと云ひしを、

大田  
之記

全文より何れ、秋云、いさうつ、此書のみ見ゆ、人の心

宣田安申の及、力申同、藤原美樹の昔、つ小物ハ昔、他人の偽作ハ

何と云ふ疑ハ、いさうつ、いさうつ、いさうつ、いさうつ、いさうつ

秋、段、子、同、各、ハ、佳、手、美、樹、子、小、遇、一、時、借、シ、与、一、ら、是、ハ、在、字、藏、ハ

た、る、こ、同、の、記、ハ、東、夏、古、云、秋、の、岸、端、小、美、樹、の、い、し、り、三、段、之、を

あ、の、事、と、誤、り、見、た、さ、う、し、物、人、の、偽、作、小、可、き、美、樹

馬  
信  
友

伴  
信  
友  
自  
筆  
寫  
本

かゝりけあゝと申名を祀まへうと又<sup>秋</sup>申名を偽りては是は同音書小  
儀字の申名ことしの隠籍多々直く<sup>直く</sup>何は<sup>何は</sup>とてけ<sup>とて</sup>張りてんん  
臣中の是所を偽作強うして<sup>強う</sup>いさうに隠籍の何は<sup>何は</sup>申名<sup>申名</sup>を疑はう  
て偽作の<sup>偽作</sup>あゝとて強う同く<sup>同く</sup>物まゝと美御玉の手<sup>手</sup>にたごま借  
まゝに<sup>まゝに</sup>写すこと何れが偽作の<sup>偽作</sup>何れに今ハリあゝとてこれ

右第一條

秋古の人の言作ん<sup>言作ん</sup>の音を<sup>の音を</sup>いひて<sup>いひて</sup>私の<sup>私の</sup>あゝと物之神風を加  
半如是と<sup>半如是と</sup>談べと<sup>談べと</sup>教ふわん

臣初のあゝと何事もや古の<sup>古の</sup>別籍よとて<sup>別籍よとて</sup>は理と形事  
を已ら思ふまゝに定むといふ<sup>定むといふ</sup>は<sup>は</sup>私まゝ古を<sup>古を</sup>いん<sup>いん</sup>の音形<sup>の音形</sup>うりて

明く<sup>明く</sup>なる<sup>なる</sup>發音<sup>發音</sup>を有<sup>を有</sup>て<sup>て</sup>隠<sup>隠</sup>は<sup>は</sup>古書<sup>古書</sup>ふりて<sup>ふりて</sup>ま<sup>ま</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>物を<sup>物を</sup>音使<sup>音使</sup>う<sup>う</sup>ら  
れた後世の<sup>後世の</sup>別籍<sup>別籍</sup>あ<sup>あ</sup>づ<sup>づ</sup>り<sup>り</sup>古<sup>古</sup>に<sup>に</sup>必<sup>必</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>如<sup>如</sup>く<sup>く</sup>形を<sup>形を</sup>わ<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>思<sup>思</sup>ふ<sup>ふ</sup>は  
し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>初<sup>初</sup>て<sup>て</sup>今<sup>今</sup>を<sup>を</sup>み<sup>み</sup>古<sup>古</sup>の<sup>の</sup>發<sup>發</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>は<sup>は</sup>事<sup>事</sup>の  
こ<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>此<sup>此</sup>の<sup>の</sup>音<sup>音</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>今<sup>今</sup>を<sup>を</sup>み<sup>み</sup>發<sup>發</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>ハ<sup>ハ</sup>唯<sup>唯</sup>一<sup>一</sup>を<sup>を</sup>今<sup>今</sup>ハ  
ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>一<sup>一</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>古<sup>古</sup>書<sup>書</sup>の<sup>の</sup>初<sup>初</sup>と<sup>と</sup>書<sup>書</sup>を<sup>を</sup>今<sup>今</sup>を<sup>を</sup>發<sup>發</sup>と<sup>と</sup>古<sup>古</sup>人  
と<sup>と</sup>今<sup>今</sup>と<sup>と</sup>口<sup>口</sup>籍<sup>籍</sup>の<sup>の</sup>初<sup>初</sup>と<sup>と</sup>つ<sup>つ</sup>は<sup>は</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>音<sup>音</sup>の<sup>の</sup>假<sup>假</sup>字<sup>字</sup>の<sup>の</sup>如<sup>如</sup>き  
し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>界<sup>界</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>初<sup>初</sup>と<sup>と</sup>書<sup>書</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>是<sup>是</sup>の<sup>の</sup>古<sup>古</sup>書<sup>書</sup>の<sup>の</sup>初<sup>初</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>

又ゆるむかへらむとよむれむひうをそれ。別たるあよめつゝ初るめこ  
かころの類ハリヤ。一言と誰とあはらまやと世ハ比列をぬく推  
今一段よりあのがくてはよ中言ゆらん。又昔も純をわの  
平しと終ハハゆむくむとツハ。後さよとと。獨るさたとひ書よ  
あひひる。如年如是と。むと書とまはしてハらん。凡と終るハハ  
ひうし。わむうせと。唱へら。思ハ後世の純も別たる  
あへん。さうらと。事と久し。別たると。後も思ハ別ぬ。ハハ  
半と終る。思ハ物と。あはらまやと。後世人のわんうせと。よ  
上古の人。あはらまやと。あはらまやと。思ハ。今も人のあ  
三。あはらまやと。あはらまやと。唱へら。あはらまやと。思ハ。今も人のあ

いひむ。あはらまやと。あはらまやと。思ハ。今も人のあ  
あはらまやと。あはらまやと。思ハ。今も人のあ  
こ。あはらまやと。あはらまやと。思ハ。今も人のあ  
さ。あはらまやと。あはらまやと。思ハ。今も人のあ  
あはらまやと。あはらまやと。思ハ。今も人のあ  
か。あはらまやと。あはらまやと。思ハ。今も人のあ  
し。あはらまやと。あはらまやと。思ハ。今も人のあ  
は。あはらまやと。あはらまやと。思ハ。今も人のあ  
秋。あはらまやと。あはらまやと。思ハ。今も人のあ  
あ。あはらまやと。あはらまやと。思ハ。今も人のあ

〜黄といふものは、平(へい)かよ上(う)の連声(れんせい)は、世(よ)の自然(じぜん)のん(ん)の音(ね)  
ア、其(その)物(もの)の字(じ)を假(かりか)ふハ、牛(う)亦(また)毛(け)音(ね)の音(ね)の方(かた)非(はず)た、  
を申(まを)す其(その)唱(うた)ハ、活(くわ)用(よう)ハ、咏(えい)歌(か)ハ、ま(ま)み(み)ハ、新(あらた)す(す)思(おも)ひの  
宣(のたま)西(にし)の由(よし)ハ、ん(ん)ハ、青(あお)の音(ね)ハ、皮(かわ)有(あ)る事(こと)勿(な)論(ろん)之(これ)揚(あ)げ、昔(むかし)所(ところ)聞(き)の  
音(ね)ハ、羅(ら)者(しや)トシテ、如(ごと)く、早(はや)直(ちよく)さ(さ)る事(こと)自(よ)りハ、物(もの)ハ、ま(ま)長(なが)く、行(い)くハ、  
こ(こ)を、運(う)ん(ん)声(せい)ハ、伝(でん)ひ、自(よ)りハ、ん(ん)の音(ね)ハ、中(ちゆう)右(う)来(来)音(ね)使(つか)ふら、つ  
れ、然(しか)れ、能(よ)く、本(ほん)の正(ただ)し、言(こと)ハ、皮(かわ)取(と)り、自(よ)りハ、ん(ん)の音(ね)ハ、今(いま)  
の異(ちが)へ、れ、れ、今(いま)のん(ん)の音(ね)ハ、古(ふる)のん(ん)の音(ね)ト、ま(ま)ん(ん)の音(ね)ハ、有(あ)る  
つ、ま(ま)に、ま(ま)に、ハ、あ、あ、止(とど)ま、る音(ね)ハ、ん(ん)の音(ね)ハ、言(こと)語(ご)ハ、申(まを)す、ま(ま)に、ま(ま)に、  
ま(ま)を、自(よ)りハ、ん(ん)の音(ね)ハ、言(こと)語(ご)ハ、つ、ま(ま)に、ま(ま)に、ハ、ん(ん)の音(ね)ハ、半(はん)濁(だく)の音(ね)ハ、ま(ま)に、

今(いま)のん(ん)の音(ね)ハ、青(あお)多(おほ)し、古(ふる)のん(ん)の音(ね)ハ、有(あ)る、ま(ま)に、然(しか)し、揚(あ)げ、る、ま(ま)に、  
阿(あ)の音(ね)ハ、れ、れ、今(いま)ハ、中(ちゆう)右(う)来(来)音(ね)ハ、言(こと)語(ご)ハ、ハ、ま(ま)に、申(まを)す、ご(ご)ら、  
何(なん)ん(ん)ハ、れ、れ、唯(ただ)し、ん(ん)の音(ね)ハ、思(おも)ひ、自(よ)りハ、ん(ん)の音(ね)ハ、言(こと)語(ご)ハ、  
ハ、申(まを)す、自(よ)りハ、ん(ん)の音(ね)ハ、言(こと)語(ご)ハ、自(よ)りハ、ん(ん)の音(ね)ハ、言(こと)語(ご)ハ、  
ハ、申(まを)す、自(よ)りハ、ん(ん)の音(ね)ハ、言(こと)語(ご)ハ、自(よ)りハ、ん(ん)の音(ね)ハ、言(こと)語(ご)ハ、  
ハ、申(まを)す、自(よ)りハ、ん(ん)の音(ね)ハ、言(こと)語(ご)ハ、自(よ)りハ、ん(ん)の音(ね)ハ、言(こと)語(ご)ハ、

本(ほん)巻(まき)二(に)條(じょう)

秋(あき)上(う)右(う)ふん(ん)の音(ね)ハ、れ、れ、今(いま)ハ、中(ちゆう)右(う)来(来)音(ね)ハ、言(こと)語(ご)ハ、ハ、ま(ま)に、申(まを)す、ご(ご)ら、  
ま(ま)に、見(み)見(み)告(こ)兼(けん)行(ぎやう)覧(らん)別(べつ)南(なん)礼(れ)今(いま)可(か)同(どう)惠(ゑ)也(や)久(く)良(ら)三(さん)ま(ま)に、  
ハ、申(まを)す、自(よ)りハ、ん(ん)の音(ね)ハ、言(こと)語(ご)ハ、自(よ)りハ、ん(ん)の音(ね)ハ、言(こと)語(ご)ハ、

小んの白れとて用ひぬとていふは一定の字なるをいふ也  
等の音を假し其用はよ上より連声より自然の用はは  
む共ん共呼とて小を意ひむよハ用口の妙用文字  
のよ小活動とていふは

宜古ハ木のてんらんらん人の数をもてむをむらむあむとむを  
さぶふ呼し成るまふ思兼見南等のんの白の字を書ふん  
をむとていふ声あふ依る借たつ物之借たつ例を集中して化  
書くとて多し申す物名の神れみを耳南とて書ふ勢を思へと  
んの白の字を書ふを以て必んと呼し勢とてハ神とてさる古ハ  
かんあんと呼とせむ又木の例をむとてのあむハ音の字を借

とてと書ふを考月分とてとむとてとてとて又玉の名の多  
示波不丹波と書ふとて初名あやの古書ハ太逆波とていふ  
ふんむとていふはとていふはとていふはとていふはとていふは  
た。物とていふを如くしてとていふはとていふはとていふは  
呼はとていふはとていふはとていふはとていふはとていふは  
教いとていふはとていふはとていふはとていふはとていふは  
とていふはとていふはとていふはとていふはとていふはとていふは  
三。音とていふはとていふはとていふはとていふはとていふは  
といふ教とていふはとていふはとていふはとていふはとていふは  
とていふはとていふはとていふはとていふはとていふはとていふは

此の例より遠くふさや又用口の妙用又字のため不活動共々  
可なりまといふ今世別たのちふらびこく古の正しき思ハ  
ぶるものこ具しりあふまゝく来ぞて

古より三條

秋 三高しそとむらぶとよふいま音のうんあがく所國の言法の連  
声ゆを昂かんとんと互ふあゆハせと唱へて聲の且字のむを假見  
るゆに物共苦業あまの唱るまはらく唐言宗を楊妃のあま三節  
と書たてしを儒士ハ里らんうと割るまむらうといふ及俗  
の呼名は係三高しといふがんぶらうと唱るうらんあらうと呼人  
意曲象の三老女をゆらんらうと唱るこ此の自然の連声は昔の

金明軍とあむいぬらんと唱あてしあむかろらむハ連声せ  
史が春卷とあむいぬらんと唱あてしあむかろらむハ連声せ  
宣いこむハはらうとあむいぬらんと唱あてしあむかろらむハ連声せ  
あむいぬらんと唱あてしあむかろらむハ連声せ  
愧る赤白をいぬらんと唱あてしあむかろらむハ連声せ  
てハ唱へらんと唱あてしあむかろらむハ連声せ  
あむいぬらんと唱あてしあむかろらむハ連声せ  
あむいぬらんと唱あてしあむかろらむハ連声せ  
あむいぬらんと唱あてしあむかろらむハ連声せ  
あむいぬらんと唱あてしあむかろらむハ連声せ







うそ水正し〜ハセム但〜  
音使のうら〜  
ハ不用の物〜  
音使さ〜  
べ〜

右戻回條

秋更云自然の音〜金石絲竹草木羽毛の音ハ人の音小  
正〜  
止〜

草木い〜  
声を〜  
声〜  
中〜  
い〜  
〜  
真物の音〜  
〜  
信〜

の長しき者之の在在尤在也又之論を以て之を前出各音の長きを  
を以て國の之初とんが及て正しくわくべきといふもいふも元來其  
へ有る正きといふも音の長きを正しといふも又一人の四をて其れ  
より小の音といふも自然の音なり其れ論の論なり事之我等一他  
早し之親ハ直に所國死の人心を以て昔の人をて粟こころの  
言過ちあふりしをてや

宣一ニハ余がりしをていふ心持を以て之を大にお違の之れなり余  
いふるもの声を正正といふも人々を以て万物の声も過てを正正  
りふる小作人をも人の音も物も物も音も小其正正正各異なり  
物をも人々を以て物も音も過てハ此小正正はは度や物也

て人の音も過ていふも又正正も人々を以て琴を弾たはは是も人の  
声も物も過てハ難は是を正正といふもたはは正正なるのそをて其れ  
又人のわらふ声琴の声も物も過てハ此小正正はは度や物也  
ふてはは物も過てハ正正も人々を以て又練行正正の音も人  
人の言辭も合奏も其れを正正といふも音律の快さを以て其れ  
物の音も過てハ此小正正はは度や物也  
の音も物も過てハ此小正正はは度や物也  
いふも人の音も過てハ此小正正はは度や物也  
皮人の音も過てハ此小正正はは度や物也  
いふも各物の音も過てハ此小正正はは度や物也



これハ今御着の主とて破きをあらはれし事なりとて  
以ていふにわけまはるる事なりとて皇統の無窮なり  
君臣の通り変易ありあらず万國の事ありか止し  
りし御のまきを皆名止といふ是を正としそのや我  
も此早しといふ事世に内國の事ありといふ事  
も此早しといふ事早しといふ事世に内國の事  
有る事ハ本より皇國の父の如く君の如く外國の子  
の如く臣の如く此世の如く君父を尊しとて臣子を早  
とせざるハ御の御の御今御着の事なり内國の事  
内國の事なりといふ事此世の事なりといふ事人  
を尊む事なりといふ事破らむ事なりといふ事  
心を

本意五條

秋 半端又右正音とてなりんの声ハ後々々々  
いふ事なりとて信ひせん外半端はありとて固く  
凡言無事とて出たむとて思ふ事ありとて此  
後々端々の中なる事なり初階の事なりといふ事  
安和と唱へたる事ハ御を祈因とて破と御とを  
いふ事なりとて女はしとて衣ハ中々音不割有る  
事ハ於て衣ハ唱へ口ありとて時人なりとて  
と御とハ御とて呼ぶ事なりとて不偏見を後々  
いふ事







秋 魚の名は鯉と蝦と共る衣比と草木は標子西後盆子の共  
る伊知比と云此類清濁巾中濁の動用ある其分れ之こい  
る文字の名を以て呼ぶ言類の用をなす可いこと  
べし又漢を河皮沫を所和延を波用榮を波衣堪を多因絶を  
多衣の類は教ふはけいんをわく書留くは音の用は河  
る事物をあるたふは書初たりといく此何書契東くそ是を  
採るやいほくをく小漢土の利皮を羨こいこの法則  
をて教をしりの被土は後くの人文字を合さる事物を以  
てしつてある其例は莫子小日と合さる日没をさる馬  
を合さる自動とさるに教はるしり覚えたり是は日莫陰遠と言  
さをばはくしつて方へたを口へきをさるとんはさる後人の意を  
是は問の言類を得る其意を教へるつて河を古意あると思はる  
と云此類も万葉集の東人の言あり音句は述べたこと一首の  
意を以て八岐流へく河河母志るといひては母をんとは内崎の  
商人の心得へく河や波流波母と云くは春哉や河母をかん  
針或は八ふは思ひくしつてのさそきこ一首の意を得る其物  
其事ははくしつて河をさるなり此理義の相當らるる成之淺  
事以て推察せざる其他人を教ふをよ小の改むとも又くはまきと  
史の辨行のまきとるも業の録を概之あるまきとる辨もあはる  
宣 清濁のふ小上古く有る假字をま書かれば標と蝦と

秋 魚の名は鯉と蝦と共る衣比と草木は標子西後盆子の共  
る伊知比と云此類清濁巾中濁の動用ある其分れ之こい  
る文字の名を以て呼ぶ言類の用をなす可いこと  
べし又漢を河皮沫を所和延を波用榮を波衣堪を多因絶を  
多衣の類は教ふはけいんをわく書留くは音の用は河  
る事物をあるたふは書初たりといく此何書契東くそ是を  
採るやいほくをく小漢土の利皮を羨こいこの法則  
をて教をしりの被土は後くの人文字を合さる事物を以  
てしつてある其例は莫子小日と合さる日没をさる馬  
を合さる自動とさるに教はるしり覚えたり是は日莫陰遠と言  
さをばはくしつて方へたを口へきをさるとんはさる後人の意を  
是は問の言類を得る其意を教へるつて河を古意あると思はる  
と云此類も万葉集の東人の言あり音句は述べたこと一首の  
意を以て八岐流へく河河母志るといひては母をんとは内崎の  
商人の心得へく河や波流波母と云くは春哉や河母をかん  
針或は八ふは思ひくしつてのさそきこ一首の意を得る其物  
其事ははくしつて河をさるなり此理義の相當らるる成之淺  
事以て推察せざる其他人を教ふをよ小の改むとも又くはまきと  
史の辨行のまきとるも業の録を概之あるまきとる辨もあはる  
宣 清濁のふ小上古く有る假字をま書かれば標と蝦と

まぶすてとれし又襟のいりひ西後並子ハいりこまハ何のまぶす  
てらほむむ地ニつをこふ出やむハ難音の属念とこ小く編意ハ何  
る原物ハ物小くいへるにけしとまれつて半竟難音の意ハ清濁中  
濁のまぶあふしてハあつたつていふは是れはさるの初がとて先清濁  
を假字を用ひるにハ編意ハ波音の音使の中濁ハ上音ハこれ  
あつてしと前集のいへるにさるその中濁ハ無しといふ言  
語の用をわすれ何事ハあつたあつた其言の意ハ上音の音  
てあつてしと難音さるるにさるといへるに何れもさるし此中濁さるるに  
差別さるるにさるといへる著橋端あつた何れを以てさるるにさるるに  
こはるるに編意の上音下音を以てさるるにさるるに神變紙あつたハ  
声の上り下り中音を以てさるるにさるるにさるるにさるるに  
事ハさるるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに  
さるるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに  
とて書るるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに  
編ハあつたとやうにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに  
のみの事ハ何れも何の意ハ何れも何れも何れも何れも何れも  
よめし書るるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに  
さるるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに  
霜下<sup>ナ行</sup>立絶<sup>ナ行</sup>頤<sup>ナ行</sup>糠<sup>ハ行</sup>萩<sup>ハ行</sup>煙<sup>ニ行</sup>松<sup>ニ行</sup>待<sup>ヤ行</sup>守<sup>ツ行</sup>編<sup>ツ行</sup>聞<sup>ツ行</sup>止<sup>ツ行</sup>我<sup>ツ行</sup>輪<sup>ツ行</sup>のやうの類同音  
の言ひする書るるにさるるに何の意ハ何れも何れも何れも

声の上り下り中音を以てさるるにさるるにさるるにさるるに  
事ハさるるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに  
さるるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに  
とて書るるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに  
編ハあつたとやうにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに  
のみの事ハ何れも何の意ハ何れも何れも何れも何れも何れも  
よめし書るるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに  
さるるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに  
霜下<sup>ナ行</sup>立絶<sup>ナ行</sup>頤<sup>ナ行</sup>糠<sup>ハ行</sup>萩<sup>ハ行</sup>煙<sup>ニ行</sup>松<sup>ニ行</sup>待<sup>ヤ行</sup>守<sup>ツ行</sup>編<sup>ツ行</sup>聞<sup>ツ行</sup>止<sup>ツ行</sup>我<sup>ツ行</sup>輪<sup>ツ行</sup>のやうの類同音  
の言ひする書るるにさるるに何の意ハ何れも何れも何れも



事の如きといふものありける中せし難き事ありて人の歌とありける  
物の音を使ひてしる。活用の字段をきく。聲の新字を教  
ふ。遠きうたの原平修字ふかに。をんと又さしけさふハニを  
りと又さしけさふ筆尾をこゝのまじりを新く。物之梵ハ  
ハ是らを変替しつゝふさきさうやあらハん凡事物を又使ハ  
上古あらつゝふ直つゝ後つゝ逆あらつゝ皆所つゝつゝ後  
小補さしけさ利ありてあらつゝ一氣にたつむべし。さ  
ハ言部を書にしして。證例をさしけ活用を口言に分て考へむ  
中の教字例のさしけ拘泥しし他人を教ふ教ふべし。さ  
宣さしけ古事記の高きの中ふ波を後世の和の如く唱へし。半濁  
と稱さしけの部さしけ百字所あり。あるせし百四十のさしけ皆濁  
音の波の字を書き。濁音の婆の字を書き。さしけつゝふ十回さしけ  
ハさしけ其の十四のさしけハ他の中ふ波ハ作しを強さしけ七つ  
之餘古字本を三四本に校合さしけ。和本のゆゑ。其のハ今三四本に別  
本を校合さしけ。ハの七つハ波ハ作ま。何のさしけ。婆ハ後の語字  
作し。さしけ。ハ波ハ婆ハハま。つゝハハ。サ。此れ外とま。し  
る。ま。ハ。こ。書。寫。誤。あり。さ。つ。ひ。と。せ。よ。百。字。の。中。ふ。ら。つ。ら。  
ら。ふ。七。八。の。方。を。執。へ。し。ハ。半。濁。有。し。證。こ。の。れ。ハ。今。東。百。字。  
の。本。の。波。を。書。き。さ。ハ。何。の。い。ん。ふ。り。ハ。半。濁。と。つゝ。ハ。音。有。  
て。其。の。後。の。さ。し。書。の。の。ち。さ。あ。ハ。百。六。十。の。者。こ。の。さ。し。

事の如きといふものありける中せし難き事ありて人の歌とありける  
物の音を使ひてしる。活用の字段をきく。聲の新字を教  
ふ。遠きうたの原平修字ふかに。をんと又さしけさふハニを  
りと又さしけさふ筆尾をこゝのまじりを新く。物之梵ハ  
ハ是らを変替しつゝふさきさうやあらハん凡事物を又使ハ  
上古あらつゝふ直つゝ後つゝ逆あらつゝ皆所つゝつゝ後  
小補さしけさ利ありてあらつゝ一氣にたつむべし。さ  
ハ言部を書にしして。證例をさしけ活用を口言に分て考へむ  
中の教字例のさしけ拘泥しし他人を教ふ教ふべし。さ  
宣さしけ古事記の高きの中ふ波を後世の和の如く唱へし。半濁  
と稱さしけの部さしけ百字所あり。あるせし百四十のさしけ皆濁  
音の波の字を書き。濁音の婆の字を書き。さしけつゝふ十回さしけ  
ハさしけ其の十四のさしけハ他の中ふ波ハ作しを強さしけ七つ  
之餘古字本を三四本に校合さしけ。和本のゆゑ。其のハ今三四本に別  
本を校合さしけ。ハの七つハ波ハ作ま。何のさしけ。婆ハ後の語字  
作し。さしけ。ハ波ハ婆ハハま。つゝハハ。サ。此れ外とま。し  
る。ま。ハ。こ。書。寫。誤。あり。さ。つ。ひ。と。せ。よ。百。字。の。中。ふ。ら。つ。ら。  
ら。ふ。七。八。の。方。を。執。へ。し。ハ。半。濁。有。し。證。こ。の。れ。ハ。今。東。百。字。  
の。本。の。波。を。書。き。さ。ハ。何。の。い。ん。ふ。り。ハ。半。濁。と。つゝ。ハ。音。有。  
て。其。の。後。の。さ。し。書。の。の。ち。さ。あ。ハ。百。六。十。の。者。こ。の。さ。し。







ふきくもあつた人の假字あるに其字のあつたあつた人古言のとき  
れりりしとち日本に記あるに字を二音三音とも兼用ひるもどきとて  
事紀の假字に一字にたゞ一音のみ用ひたり二音三音も兼用ひたり  
例一つに那きふ年をのむとんふ兼用ひるもどきとて此れに記中假  
字二音兼用の例あるに此一つを以てて跡の統の非なることを説く  
上古の事、意くふ宜しくして後不違くさるるハことなりといふは  
後につゝこふ為禱のもゝ余がつてひふりあは後世の事ハ皆悉くふ  
ハけむとて上古の事を後世を以て統を以てしとてハハハハハハハハ上  
古よりして統へしと後世の事ハ後世を以て何ぞせしむるかあふ  
詞の玉珠あるに後世んと呼ぶは、そのまを以て用ひたりとてハハ  
を以てて万を思ひはくはまへし又見んは、人の類のんあど上古を  
論する、所は法くはむとてハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
を、こゝに余とてもまぐくむハ呼ぶと行りしりぞ常ハ尋常  
のくくハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
を以てて例とてまへしとハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

古言ハハハハ

秋或人し、はいりてのを、かこるる、急のお、いそよて位置を、く  
くわを、はくし、を、ま、身、と、ん、く、い、ぬ、あ、ぬ、の、通、ひ、を、何、く、わ、り、あ、ん  
を、その、う、ん、大、ハ、必、お、り、ハ、小、ハ、必、を、つ、ふ、よ、お、ん、重、く、を、ハ、後、り  
い、く、り、又、う、ぬ、ぐ、ん、を、ま、い





さへ事のついでふいそむ先輩あははとけふ言の通す例  
のあへ思ひ小い共務かへ成あははの郡をけふ言の郡とい  
へともけふけふあははとけふ言の通す例のあはは  
ふ例のあへ成にハたに愛名の子音を過へへあははのあへ成  
也名の敬字かへ例のあへ成にハたに愛名の子音を過へへあははのあへ成  
秋あへ成にハたに愛名の子音を過へへあははのあへ成  
或人のいぬあははのあへ成にハたに愛名の子音を過へへあははのあへ成  
小ははのあへ成にハたに愛名の子音を過へへあははのあへ成  
ははと不二谷成章のあへ成にハたに愛名の子音を過へへあははのあへ成  
と通す例のあへ成にハたに愛名の子音を過へへあははのあへ成

宣 尾張又のあへ成にハたに愛名の子音を過へへあははのあへ成  
本第九條

秋 財向の大をあははのあへ成にハたに愛名の子音を過へへあははのあへ成  
雅載のあへ成にハたに愛名の子音を過へへあははのあへ成  
信ひくあへ成にハたに愛名の子音を過へへあははのあへ成  
言のあへ成にハたに愛名の子音を過へへあははのあへ成  
宣 言を連言はははのあへ成にハたに愛名の子音を過へへあははのあへ成







取ふしつとんふとこ道いふりいといたふ似たきこ水ハ  
たに此二つの用をくくくくくく急從音ヲ發シ瓜ノく  
知ハ瓜ヲくくく瓜ノ亦モ落ノ音の中へあつたつとつと  
とつと二つ共右正の瓜音なり中例をいふ水中物の落メ  
とつとをいふは中百多々の雅言ハつとつとあつたつとつとを  
今俗言ハつとつと共つとつと共りふとつと瓜波氏ノ論の  
取ハ是とつとつと雅言といふと又ノ唯を俗言ハ例  
つと共りふとつと共りふ是とつとつと瓜之たんとつと雅言とい  
とつとつと水とつと止色雅言ハ吸色俗言といふ爲のけつとつとを  
はとつとつとこれたつとつと食とつと人とつとをくくくつとつと人ハ残  
つとつとつと貴人の中へ見るとつとつと共ハ殿とつとつと  
今瓜波氏ノ音を俗言ハ思ハつとつと思ハつと人ノ所人ヲ残つとつと  
と思ハつとつと上つとつとつと貴人の上へ見るとつとつと  
とつとをわむりの

新考十三條

秋又云今通人ノ續ハ証例ありやとれつとつとつとつと又  
續ありつとつとつと兄の言のつとつと目ハ千歳を度量つとつと  
是ハ後つとつとつとつとつとつとつとつとつと口耳ハ試ハ  
つとつとつとつと後史の古書とつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

一とるわきと行ふと一折言語を物と書しあはる其意  
 さまさん下又なとつありの死物を運けり其活物を作さる  
 二十歳の上十里のあつていふ其文字を見り今の只小唱今  
 の耳小唱な事の理を傳ふと小は其死物を己て其活  
 物を作さん一折なとつあつて有る其作の音句をいふ  
 河、其音句を正さん一其音句の因り来り而を知らず  
 其因て来り而を知らん一入りの喉舌牙齒唇等より  
 其喉舌牙齒唇等の活動を以り古今言語の精微を採  
 り事必然別ふよりさし其止しを傳ふ一此史言りや  
 阿等の正音初御て三音をふきと是即喉舌音を弁せん  
 第一列と小は五音配し三行をふは餘の七行も因り来り  
 此れさん一必因り来り此れも聲なり其七行をふさん  
 一必んの句ありてんの句ありて行傳りて然のさ  
 一ばんの句ありて諸の音音小濁音をふきと然りて是通が  
 尚然の理を以り古言よんの音はる事を案ふたんの句  
 一さの取ある事ハ印度又支那共さ然も一こあて又為  
 為の理を以りてあへ然のさ  
 一むと續たりといふと續れといふ年武平の假字を以り  
 發する一何を發するといふを傳ふ一此の字むあ  
 一此れ一何とつあむとつあ假字をさして物なり其音









統ふたふの音を長くせむる所の二音を初めたるもの  
元々云を延べし初めとせむるはいと多し是所をうしり  
まうせし柳音れむ余や行ゆ行を柳音としん其  
音のえをさしむたれしん其音をさしてはふ柳音  
ことりし意はあはれ此二行の音と其聲ハ直音はあふ  
幸一の申ふをて古言とて用ひたり今例とほけし是を  
とふ古言ふ吾家と和政用としん其音ハ賀伊を初め  
政とあはれは柳ハ其政の本ハ柳音あはれと政をさし柳  
音とあはれし又此和政用の政の音ふつて其音を統  
ふは賀伊ハ柳音れ共初るとてうしりまうせし賀伊を  
柳音とあはれし又賀ハ吾の賀して伊ハ家の伊とて本  
例あはれし是の准へて又まうふあみのつてふとも心付べし

右第十八條

秋又云吟通や其みしわこあ表ハわがわの物多しを日こあ表  
とあると云は上あふうあ例ハ同しわはは是を足れは  
あ言を統ひしと表別備とてふお似たり上あふお音  
韻出没の法を今ハ没とまへし下ハこ不連音合呼の法  
とまへし是即神凡をわむるやと書てわんうぜと連音は  
書例ハ相類まへし法ハ不音使の連音といふこをわら不  
こみあはれを昔期大君と書て他ハ我大王と書たり今ハ

二訓と合呼まをるを示す書例と是を上古の連声の創を  
傳へたの明証ある是を文字を由るが小の讀まはる所因を  
其の心も平らふくを懸く思ふふんをこと今道此音句の  
學術と以て即國の古言を教むの志何して年月の思ひ  
其の人の是に或いしは併反術を以て其可長長長を以て小  
の併依て彼人の言のまふく小書海よりんせまのこ何ま  
うー一六  
花押

直 出る小余がらうあなまといつ小を例出せらるる音を延一約  
る例を以ては其の何を出没の語と合呼の語との差はハのつ  
心もその語の語を論するハ其用の事も何らふめら反事之此  
を以て小の語と同一と云ふ波氏やも其れは其象類を象  
の語を以て出る語を以てやうに彼語も其語を以てハ大の古  
言の語を以てするまうのつ小の語と 此は我大王と書らるる  
今の如く二訓と合呼するを以て其例とや此統の如く我  
大王を以て連声合呼の語を以て其の語を以て皆二訓と云ふ  
と云ふ思ふは少くも其の古事紀の如く其の語を以て其意  
當故義との有る和親と書らる一つと其語を以て其意  
連声合呼の語を以て其意を以て其の語を以て其意の  
めらるるは此一つを以て其意を以て又此一つを以て其意の  
理を以て其意を以て其意を以て其意を以て其意を以て其意







あつし、隣人こころを、終を今年百十八歳おれりといふ又一、  
百十五歳おれりといふり、いふ人、は、傳説の、いふ、己終を、  
くせ、いふ、もの、事、お、あ、い、は、ゆ、ち、老、廻、小、河、へ、今、年、百、歳、を、  
い、と、と、を、答、へ、い、ら、う、と、い、ふ、と、獨、老、を、お、終、續、念、を、い、ら、う、  
夏、を、終、へ、い、九、十、年、事、の、事、を、今、や、二、拾、年、事、い、ら、う、い、は、成、  
ぬ、い、ふ、と、い、ふ、其、言、系、と、大、や、う、と、い、ふ、長、生、を、い、ふ、人、の、有、さ、い、  
い、を、い、ら、う、と、い、ふ、時、一、世、十、万、歳、を、い、は、い、ん、其、年、數、を、い、  
ま、と、い、ら、う、に、指、を、折、ら、う、兼、い、ら、う、い、ふ、と、い、ふ、と、あ、ら、う、  
是、ハ、日、本、紀、小、説、ら、古、事、記、ハ、裁、を、い、ら、う、思、ハ、大、吉、の、傳、  
説、と、い、ふ、と、後、小、探、出、の、人、の、收、め、と、い、ふ、事、と、有、ら、う、  
意、以、ら、う、陶、也、一、事、と、有、ら、う、小、二、記、の、傳、説、を、同、め、ら、う、  
ハ、疑、わ、ら、う、と、言、共、獨、難、念、の、休、時、と、い、ら、う、と、い、は、ら、う、  
と、い、ら、う、國、紀、終、止、の、後、小、川、島、の、皇、子、等、小、勅、有、ら、う、探、せ、ら、  
さ、ら、う、と、い、ら、う、得、田、等、の、口、誦、小、古、事、記、成、及、獨、遺、漏、や、有、  
紀、傳、人、等、の、探、せ、ら、う、と、有、ら、う、と、い、ら、う、日、本、紀、成、ら、う、神、世、  
一、書、の、異、因、現、出、た、ら、う、獨、又、後、の、古、籍、於、遺、事、ハ、獨、有、所、遺、愚、臣、  
不、言、恐、絶、無、傳、と、云、ら、う、と、い、ら、う、諸、事、の、傳、説、は、い、ら、う、  
千、歲、の、事、に、い、ら、う、己、其、服、と、い、ら、う、漫、不、取、捨、と、い、ら、う、衆、の、疑、念、を、生、  
せ、ら、う、と、い、ら、う、旧、事、記、今、ハ、偽、多、の、物、小、皆、稱、定、せ、ら、う、其、小、共、古、書、  
の、疑、問、後、人、を、を、稱、ひ、ら、う、と、い、ら、う、問、に、答、の、事、と、い、ら、う、と、い、ら、う、師、











行ハ道々々々其江戸店ある千代の方々々々京の主人の御下以  
あせせ々々状は其御代々々々江戸一府々々々々此方々々店中一人々々  
江戸御代々々々々一人々々々々店中一人々々御代々々々々  
江戸とわ々々々々々々々々々又一人々々い々々々い々々々々々  
江戸とわ々々々々々々々々々江戸中一人々々書々々々店中一人々々江戸ハ  
た々々々々の店々々々々々々々々々々此統々々々々々々々々々々々々々々々々  
京と華々々々中国と暗々々々々々々々々々江戸小徳王々々々々日々々々々々  
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
目々々々々々々々唐天竺の目々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
事々々々々々々々々々唐天竺の日月々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
画の御々々々々

何の用々々々又阿蘭陀の人物の御々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
を見々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
雜々々々々々々々々々又皇國のい々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
のち々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
と廣々々々々々々々々々下國ハ下國々々々々々々上々上々上々上々上々上々  
國々々々々物々々々々々南極の下々々々々々荒々々々々々々々々々々々々々々々  
と生々人物々々々々々々廣々々々々々々々地球の三分一々々々々々々々々々々  
を々々上田氏ハ二々々々々々々々々々最上之國々々々々々々々々々々々々々々々  
四海々々々々元々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々











道く今世ハ今世を宣しと此言旨味あるを

直し万国を經歷し右左の国を以て何と云ふに

心得及論之已既より右左の事とあるは其の事ハ

福共也國ハ此ハ皇國なりといふをハいふて其の

事ハ此國の本在何を象託の妨さむ引りて一國の

別ハ本在まていふし此ハ此といふは此の事ハ此

ハ此の事ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此

ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此

神の心の中をのぞきしこと神の心の中をのぞきしこと神の心の中をのぞきしこと神の心の中をのぞきしこと  
 止るは神の心の中をのぞきしこと神の心の中をのぞきしこと神の心の中をのぞきしこと神の心の中をのぞきしこと  
 其善惡非止真偽をよきと悪しと感ひしこと善惡學問亦亦  
 有る三條

神の心の中をのぞきしこと神の心の中をのぞきしこと神の心の中をのぞきしこと神の心の中をのぞきしこと  
 其善惡非止真偽をよきと悪しと感ひしこと善惡學問亦亦  
 有る三條

眞 清濁の精微なるハ文字東漢以後亦立たる法之ハ甚る可  
 云之りしこと口器の精微なること亦亦不假字を用ふこと精微  
 亦亦たれしこと口器の精微なること亦亦不假字を用ふこと精微  
 俗語少少祖父母をバ濁りてらむといひ父母をバ濁りてらむ  
 といふは清濁の精微なるハ文字東漢以後亦立たる法之ハ甚る可  
 清濁乳の見しこと之甚るに強きこととさしこと精微なる  
 清濁乳の見しこと之甚るに強きこととさしこと精微なる  
 清濁乳の見しこと之甚るに強きこととさしこと精微なる  
 清濁乳の見しこと之甚るに強きこととさしこと精微なる  
 清濁乳の見しこと之甚るに強きこととさしこと精微なる

古事四條

秋 木々々々々々々々其時代之の風ありて争ひつゝ其のこころ  
を古人の拾言存志し此雅皮申の意は今後ありて異國人  
のゆくまゝ麗艶小作出たつてふありて是は格調と其世の風俗は  
ゆくゆくは是は日本紀竟宴の意を仁徳天皇を煇ヒカ奉事と  
す採擷するしと稱せし事なり又見ゆつてても疑ふべき者は  
且素戔嗚の八雲曲玉舞の赤玉ハ少々お見尊のおきつる  
神武天皇の古原の盤げつゝ中屋伊須乳余理媛の佐井川  
又古少の市の所作を後の万葉中りてありて有へて拾遺に  
よひていふに飛鳥處所系藤原の脚世のしるまゝの凡安也

へつと作の同く大皇領史ありて不あせとける事昔少  
福輪せしは決つ物ふりて云決死するんありて人毎  
よハ折かそとゆへんを大人をこころを昔剛一純と稱す  
るゝ然もハ時代格調の論定と争ひつゝいふに大  
古の傳統異同ありて此事も素社及存在疑しとて異の子  
宣 二死小載述る上存の意共の中や、後の調とありて  
りや事ハ同部を論じ既よいて来たるといふ上田氏の師といふ  
人 藤原宇下皮 其傳人まゝに然も共今思へばおのいふはたか  
いふにまゝに事なりて大方述る古事系古事系の古事系とて  
其詞又つゝ其の解りて耳遠とてを古とて耳とて



欽 天生倭國三韓其命の國々もまふか彦彦神の何事も始めあり  
神のときをおほゆれは八層根を高くまはれは神の御心もやめし人有  
今八層根を高くしそてよ然ふは河の皮你かりや水の八層の誓へた  
富士の三年の信ふ回しめんこ水は八都く尋常の人鬼衆  
そそりし一他を度よまを勢よそ根高かりていとわいん此神  
常世より後よりを因としらとてしめしつゝおそくはれは太  
流の事蹟の中より此信は神よ荒簡し何共論をいふは  
らに常世國は他よ在りてそそ知りぬを初らるしそ  
いふ神言の精意は他を早ししめよおほくそ却て神言の  
意小いなること一國をこけおほくぬを以て此神は天地内の  
不姓ありて万事を創業し給ひたりおの六代統しそ信ふ  
へく次大名神の力を以て心を一つしそ此小島のゆえに信を  
ありて給ひて他よ去るをそそや粟茨お縁をて彈くしそ  
紙の舞わたり一神ありて廣くありておの小事を創業し  
給ひておのいふそやあといふおおそ人石の小島の善ありて  
と介を以て八方國を悉創業せしといふお傳統ありて喜ぶおそそ  
ハ此常世國より後々の國々も思慮忘れたるの念わたりて我が先  
波心よ是をそ原天孫降臨以て百八千方歳の傳統ありて  
より神時より人の神を因としそ杵の後より於義より先神よ  
う君を以て意たりて神よ是れおのいふそ不と言語は

わく皮被土うんうと聖主と宗務をいふ由あるをりくしういふを  
有人と国小君あり家よまありしり。此る者の心をいふをりぬる  
王少人懐秘のりわく皮をいふく大人の著述を叙我懐言の何  
此国小臣のりうはあうんこの後諸小臣を著のたれ小託示をい  
用意を小国内の鼻訣ビキツケを其中の後其事共いふをや  
あうと其れハ言をこして被立言家の弊をいふ少田くふ事うを在  
又返り己の罪中物や大刑具を挿く立射り如何言をををバツ  
福庫日の柱言のりしこし思を神直昆大直昆の所愛う六連ふ  
へしうううしとあうしと程むいし

一層鉾在人といふ書を讀むといふをうるあひうをりくわの  
思ひ少ふうんうと等をも都よりぬらういふ人たれハ何れしう  
うをあう物のぬるうるがうんうう水たうてをむとみたれ。  
あうあうのえのわつやうつのをう何をいふそのひやせむいせ人  
国小忠存のりのお我ハいせ人小忠存のむのぞ

上田新成

宣今一層眼をさうしとてよとていふふしつ小見うの  
任人の執を物事を歸しとて何理めしつひう金を物事をい  
うふしつひは徳をいふ世人の眼をわく皮とつてをバツ己の辨茶  
一層さうしとて己よハいふ水眼さうしとて己の辨茶  
て余をいふはしとてや物事を又今一層眼といふハ兒童の何

それ物にきりし痛き乃ち物に己と又今一層眼を高く  
しこそとつてか原地一海の羅文とせん後意の幸を  
てまらつしと原西事かみ海を渡すも一もの人の  
万国を巡る一船つていふ奇異の説を常見の人を  
く見を信せむ物に子曰さふいふの書生は皆  
あつていふ物に今上田氏をくけふも  
論はるるハ何事かやいふも一抑奇異なるも  
信せむハ例の漢意あり凡人の由智を以て大神の妙業を  
測らむとせりこの事既に首尾花より鉄粒人の  
好むも事なりといふハ今こふもいふも漢意のそ

あるんハ論をさるる一珠のこの奇異古事神万国巡るの  
何事かそれとていふ物に原西事かみ海を渡すも一もの人の  
まはるるハ例の漢意あり凡人の由智を以て大神の妙業を  
測らむとせりこの事既に首尾花より鉄粒人の  
好むも事なりといふハ今こふもいふも漢意のそ  
あはるるハ論をさるる一珠のこの奇異古事神万国巡るの  
何事かそれとていふ物に原西事かみ海を渡すも一もの人の  
まはるるハ例の漢意あり凡人の由智を以て大神の妙業を  
測らむとせりこの事既に首尾花より鉄粒人の  
好むも事なりといふハ今こふもいふも漢意のそ  
あはるるハ論をさるる一珠のこの奇異古事神万国巡るの  
何事かそれとていふ物に原西事かみ海を渡すも一もの人の  
まはるるハ例の漢意あり凡人の由智を以て大神の妙業を  
測らむとせりこの事既に首尾花より鉄粒人の  
好むも事なりといふハ今こふもいふも漢意のそ



さしつら者此神... 又かき... 聖主と崇む... 人情を... 此神の所

事を此緒... 荒蕪... 此水... 伊勢人... 人皇國を尊稱

其父を告ぐるに心をいかに練るれば忠とていふ事なくむかひに  
まよふもふつゝうひつゝうも多し其心ハ其何ぞや  
非を見付ずるに余も立死をふとてむとす。物之其心のまよひ  
もゆくむかひに余を破るも思ひひくまよひら皇國をいつひ  
おとせると多し。いかにおとせざるかの様人のたがひとなればい  
しゝりむむむとて又復れり

上件上田氏を論りて道よの善となす。物多しむかひに  
こゝれを辨るまよひの見ゆ人あるも公を好むとてむかひに  
清色あつて道にまよひていづる浪人

あゝいづれのをとりめはらうや 直長

呵荊蒞終 上田秋成ハ大坂の人也

古呵荊蒞終一卷全屋主人自序の初を村田並樹のうら  
をよむをいづるを保る寫畢

寛政十年十月二十三日の宵月燈下小書終収

伴 信文

上田秋成が作書する宵月燈の傳 秋成の神小舎の板の云

老弱より思ふに在ていづる方共らういづる者も世に落ちぬ事多し  
八月九日と共にお老は思ひていづる小つゝ海友ありてお花をいづる  
とやいづる言のいづるつゝ海友ありていづる今も此一巻にいつる  
とて止む。著書論辨に解るる若し於命庭の古井に煙をいづる  
いづる年がいづるに在りていづる年がいづる年がいづる年が  
いづる年がいづる年がいづる年がいづる年がいづる年が

寛政十年十月二十三日

先母世の人数、無名の可、  
文化三年の月、  
七十五

右園先氏が被成自年ニカケルヲ字モテ見テ秋ニ成若キ此ヨリ鈴屋を為ノ執  
ヲ破ラシト志タリトシ、翁身ニ下リテハ、後ハ心ツキテオノレ今ニテハ彼ニ多クニテ、  
志タルニミテ、己カ弟ニテ、テヤサリ、ツイトクヤシキ、今ヨリ己カ子同ヲスベキ  
ニト後悔シテ、口クセニミテ、アリシガ、ヲリ、ハ物成ニテ、アリテ、ス、ロ、言、シ、アリ、キ、子、ナ、ド  
ハサラシサ、又人ヲモ、心、ハ、叶、マ、ア、レ、ハ、秋、ニ、テ、キ、タ、キ、ナ、ド、シ、テ、ホ、ケ、タ、ル、ガ、ゴ、ト、キ、サ、ニ、ナ、リ、シ  
トサキ、キ、人、ニ、キ、タ、リ、キ、今、件、ノ、支、ヲ、モ、ハ、キ、老、テ、若、カ、リ、シ、ホ、ド、ノ、解、事、ナ、ド、ラ、悔、タ、ル、故  
ニ、テ、ハ、今、ヨ、リ、己、カ、子、同、ヲ、ス、ベ、キ、ニ、テ、ハ、今、ヨ、リ、己、カ、子、同、ヲ、ス、ベ、キ、ニ、テ、ハ、今、ヨ、リ、己、カ、子、同、ヲ、ス、ベ、キ、  
カ、月、飛、タ、ル、ノ、傳、ニ、ソ、ノ、為、ノ、語、ヲ、ホ、リ、テ、云

佛トソカキテ、  
史理教任候と、  
思てぬハ、  
老後ノ見トキ、  
コエルニ、  
アハレム

文政十三八十八坂

信友云



